

15. スギ造林地内における自生キリの生態と考察

花巻営林署

○山田 明人

中 濟 武

一関営林署

十文字 勝行

1. はじめに 課題を取り上げた背景

昨年7月に策定された「国有林野事業の改善に関する計画」において、今後国有林野の進むべき道筋が明らかにされました。その内容は一言で言えば累積債務対策と経常部門の改善により経営の健全化を図ることではありますが、国有林野の使命を十全に果たして行くためには、自己収入の確保が重要な課題と考えております。

これから発表します桐は生長も早いことから、うまく育てば早期の収入確保にむすびつくものと考え課題として取り上げました。

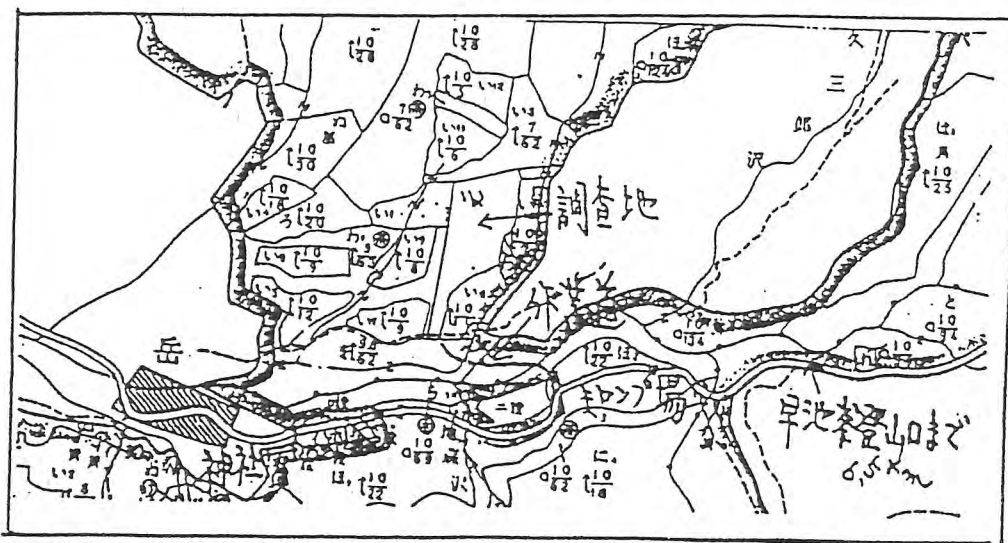
なお桐は、岩手県の県花であり、当署管内大迫町の町の木としても指定されています。それでは造林地内に自生した天然桐の生態について発表します。

2. 調査地の位置等

花巻事業区 大迫担当区部内 鶏頭山国有林 268い2 林小班内

早池峰山河原坊登山口まで6.5 km, 早池峰神社より2.0 kmの位置にあり、隣接して大迫町営キャンプ場が設営されている。

位置図



発生地の林況 (伐採前)

表 1.

種 目	自生桐発生箇所
	鶏頭山国有林 268い2 林小班内
林 況	スギ60%アカマツ15%広25%
土壌型	BD(適潤性褐色森林土)
方 位	SE (南東)
傾 斜	中 (15° から30°)
標 高	650m (600mから710m)

3. 事業の実施経過

伐 採 昭和63年度 達曽部製品事業所実行 皆伐 0.73ha
 平成 元年度 達曽部製品事業所実行 皆伐 0.20ha
 計 0.93ha

搬出方法 トラクター集材

造 林 平成2年4月9～11日 大迫造林班 枝条存置地拵
 平成2年5月8～15日 大迫造林班 スギ2,800本 植栽
 平成2年6月21日 大迫造林班 下刈(2回刈の1回目)
 (この時期キリの発生は確認できない)
 平成2年8月18日 大迫造林班 下刈(2回刈の2回目)
 (この時期キリの発生を確認する)
 報告により保残し調査研究することを決定する。

調 査 平成2年10月20日 桐発生本数調査の結果165本の自生が確認されま
 した。その調査の結果は表2のとおりです。
 調査木標示 調査木脇に標木を立ててナンバーテー
 プを打ちスプレーペンキ(赤色)で標示した。

表 2. 樹高別調査表

苗高範囲	本数	苗高範囲	本数
10cm以下	2	60cm～70cm	4
10cm～20cm	59	70cm～80cm	1
20cm～30cm	59	80cm～90cm	0
30cm～40cm	23	90cm～100cm	0
40cm～50cm	14	100cm～	1
50cm～60cm	2	計	165

尚この調査における最小苗高は8cmで最高苗高は103cmで平均苗高27cmでした。

平成3年 4月16日 本数確認調査をし、さらに

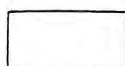
平成3年11月19日 本数確認調査及び伸長調査を実施した。

4. 発生苗木の育成及び枯損調査

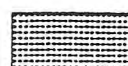
平成3年度 4月期、平成3年度 11月期、2回の状況調査では下表3の結果が得られた。

表 3

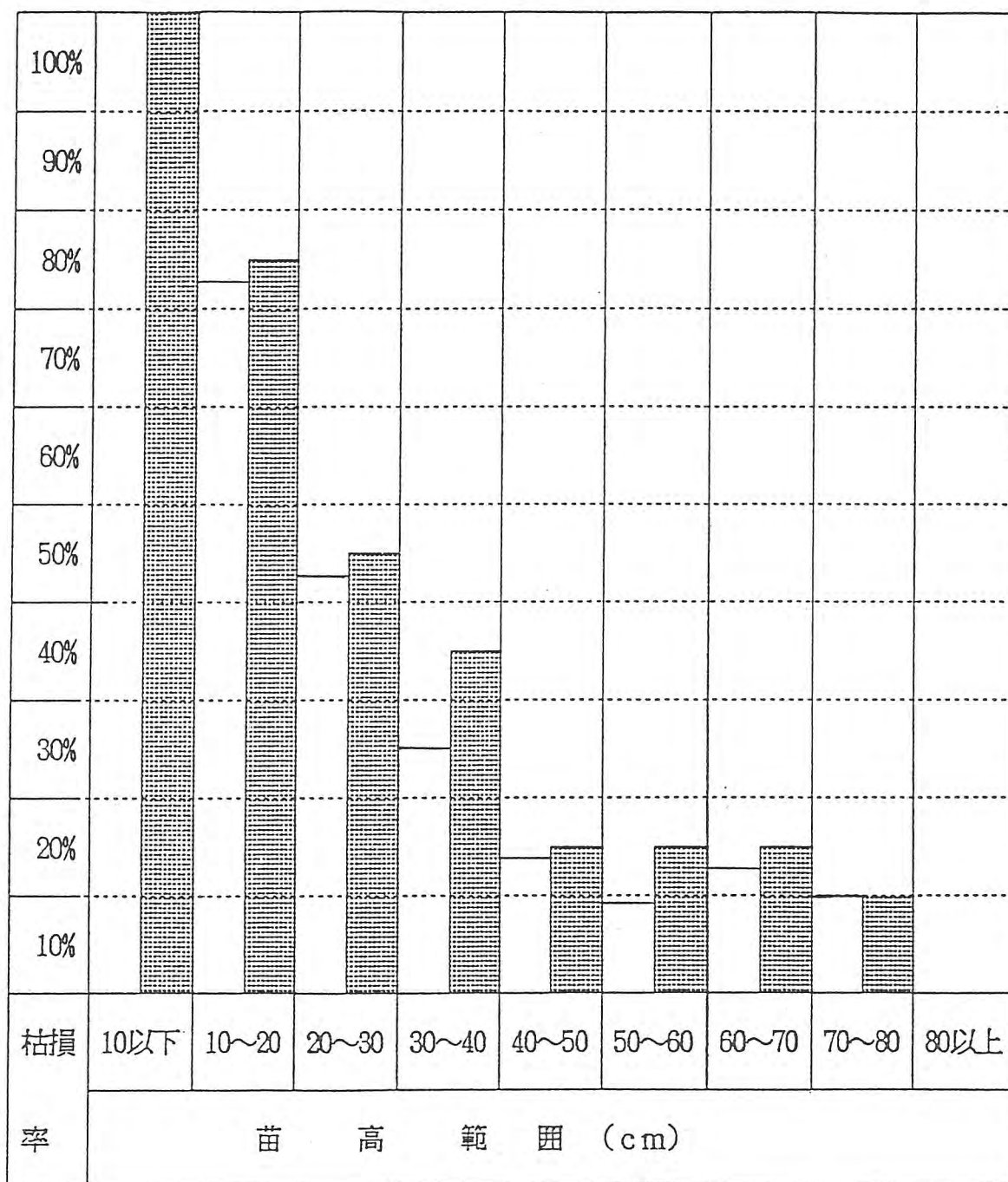
凡例:



3年4月期調査



3年11月期調査



平成3年度 4月期 最小苗高14cm 最高苗高108cm 平均苗高29cm

平成3年度11月期 最小苗高16cm 最高苗高195cm 平均苗高69cm

平成2年度～平成3年度11月期現在迄の伸長量

最小伸長高 2cm 最高伸長高192cm 平均伸長高42cm

平成3年度 4月期調査 成育木88本 枯死木77本 枯損率47%

平成3年度11月期調査 成育木83本 枯死木82本 枯損率50%

<枯損要因等>

種子から発生した桐の稚苗は非常に弱く野ネズミや野ウサギに見つかれば根や幹は大好物とばかりに、食害されて大部分が枯死してしまうとされている。

地元桐栽培専門家の話によりますと3年経過して枯死しない稚木は、成木すると判断されるので栽培に必要な諸条件により手入れをしなければならぬとのこと
です。

1年を経過して枯損率50%は極度に少ない枯損であり、来年幾ら生き残れるかと意味深長に話してくれました。

5. 考察及び今後の取組

大迫町史によれば、当地方は農業を専業とし林業を副業と位置づけして、屋敷周りとか田畑の空間地から裏山の傾斜地まで利用できること、そして比較的短い年月の間に高い収益を収めることができることから、桐の栽培は町内各地で行われ、特に大迫町内川目流域の大又部落は盛んであったと記録されている。

現在においても、家の裏や田畑の空間地など小面積ながら随所に桐が植栽されているのが散見される場所である。

最近桐の外材過剰輸入により、価格の変動が大きくなり、一般的には桐栽培に意欲を示す専門家が少なくなっているのが現実のようであるが、大迫町に住む純木家具、製造販売工房「ななかまど」の家元 丹野良博氏の話によれば、

- 1) 発生した原因は、キリの種子は微細で軽いうえ「実」の周囲がうすい羽根になっていて、形状があたかも「空飛ぶ円盤」状をしているので遠い場所まで風のって飛散する
- 2) スギの成長のよい土地はキリの成長にも適しているといわれるが、この場所については良い成果は期待できない。(皆伐してあるので風を直接に受けるから)
- 3) 1年生稚木は大きな葉が2枚ついていて、それが風を強く受けて根ぐされをおこす。
- 4) 経過を観察しながら2年から3年して枯死しない成木は地ぎわから切断して新幹をぼうがさせるための台切りをして良木を育てる。
- 5) 林床は常にきれいにするよう心掛ける。
- 6) 風当たりが少なく、空気、水の流通が良い窪地が最適地である。
との事でした。

6. 終わりに

当署が管理している早池峰山麓の一角に自生した桐について発表いたしましたが、自生してまだ2年であり今後町及び地域の有識者の意見をも聞きながら天然桐の生育経過を継続して調査することとしたい。でき得れば営林局の御指導を得まして試験的な手入れ等を

実施したいと考えています。

桐を基に地域の活性化に結びつけることができるものならば、営林署としても望外の幸せと考えます。